



金城学院大学生活環境学部
(旧家政学部家政学科生活経営学科)
同窓会会報第4号
発行：2005年9月1日
〒461-0011 名古屋市東区白壁4-64
みどり野会館内



「使命・懸命・宿命」

学 長 柏 木 哲 夫

学長に就任してから一年が経ちました。「学長というのは、なんとまあ、いろんなことをしなければならぬのだなあ…」というのが、一年経った後の正直な感想です。「いろんなこと」の中で入学式と卒業式は学長としての責任が重い行事です。特に式辞の時には緊張します。今年の卒業式の式辞では「使命・懸命・宿命」という話をしましたので、それを紹介させていただきます。

まず使命。数年前にテレビで放映された、クリスチャン作家の三浦綾子さんが亡くなる少し前の言葉。「私は小説を書くことが私の使命だと思っています。使命という字は命を使うと書きます。私は小説を一冊書き終わると、くたくたに疲れます。そして命を使ったなあと思います。どんなに疲れても書き続けることが私の使命だと思っていますので、これからも小説を書き続けることに命を使いたいと思います。」「使命」というのは、命を使うことである。自分の使命とは何か、自分は自分の命をどのように使っていくのか。それを考えながら旅だってほしいと思う。

次に「懸命」。小さな島の診療所で、長い間、医療の活動を続けてきた74歳の医師の言葉。「私はこの診療所で、今まで懸命に生きてきました」。番組全体からこの医師が、島での診療に命をかけてきたということがわかった。「懸命」とは命を懸けると書く。学生が新しく社会に出て行くにあたり、使命がみつかった時に、それに命を懸けて、懸命にその道を歩んでほしいと願う。

最後に「宿命」。「宿命」という言葉はやや否定的な響きがあるかもしれない。しかし、彼が番組で、「私は、ここで診療をし続けること、そしてここに骨を埋めることが、私の宿命だと思っています。」と言った。この文脈のなかで、私は「宿命」という言葉の中に、命が宿るという意味を感じとった。一人ひとりの学生が使命を持って、懸命に生き、これが私の宿命だと思えるような人生を歩んでほしいと願う。



「総合大学としての新しい一歩」

学 部 長 藤 城 榮 一

「野のはな」会員の皆様、お元気ですか。

発足以来の歴代会長さんをはじめとした役員の皆様のご尽力により、同窓会が順調に運営されておりますことを嬉しく思っております。

さて、ご承知のようにこの4月から金城学院大学薬学部が発足しました。瀬戸電の大森金城学院前駅から坂を登ってきますと西側（旧短大）キャンパスに、本学にはこれまで無かったようなモダンなデザインの校舎が建設され、授業がスタートしました。従来、理系の学部といいますと家政学部（本当は理系という分け方はおかしいと思うのですが）のみでしたが、薬学部ができたことによって、文系・理系を含む総合大学として新しい一歩を踏み出したといえます。

大学冬の時代といわれながらも、家政学部の伝統を受け継いだ生活環境学部には、282名（生活環境情報学科96名、環境デザイン学科100名、食環境栄養学科86名）の新入生を迎えることができました。この2005年度が終了しますと、ひと回り、つまり初年度の学生が卒業を迎えることとなります。卒業生の就職状況が今後の本学部の社会的評価を左右することとなります。特に、管理栄養士を育成することが目標の食環境栄養学科の場合は、何人の国家試験合格者を出すかが、学科及び学部、さらには金城学院大学全体の発展の重要な鍵を握っています。そうした重要な時期を迎えているだけに、教員一同気を引き締めて教育にあたっているところです。

本学部が社会的に高い評価をいただき、更に優秀な人材を育てていくための教育環境を実現するまでには、まだまだ多くの努力と時間が必要です。改めて、「野のはな」の会員の皆様のご理解と協力をお願いする次第です。

例年のように秋に総会と講演会がもたれるようですが、その折に多くの方とお会いできるのを楽しみにしております。

「野のはな」の一層の発展を祈念します。